SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

アンネの追憶

2009年・イタリア映画
配給／ゴー・シネマ・99分

2012（平成24）年5月5日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data

監督・脚本・脚色：アルベルト・ネグリン
出演：ロザベル・ラウレンティ・セラーズ／エミリオ・ソルフリッツィ／モーニ・オヴァディア／スルディ・パンナ／メシシュ・ガシュパル／アレクサ・カプリエラン／サライ・クリスタ／スルディ・ミクロシュ／バコニェ・チラ

みどころ

あなたは『もう１つの「アンネの日記」』を知ってる？それはアンネと同じ境遇を生き延びた親友の女の子が語った『アンネの追憶』だが、そこにはどんなアンネ・フランクの姿が？

今まで知らなかったことが見えてくるのは収穫だが、エピソードを詰め込みすぎると逆効果？最大の難点は全編英語のセリフ！やはり、この手の映画はドイツ語でやらなきゃ・・・。

■□■原作は？『もうひとつの「アンネの日記」』とは？■□■

『アンネの日記』が未完で終わっているのは、なぜ？それは、毎日隠れ家の中で日記を書き綴っていた少女アンネ・フランクが、ある日突然踏み込んできたゲシュタポによって逮捕・連行されてしまったためだ。しかるに、今日の私たちは当然のようにアウシュヴィッツの強制収容所に連行された彼女の最後を知っているが、それはなぜ？それは、『もうひとつの「アンネの日記」』があったためらしい。

『もうひとつの「アンネの日記」』（アリソン・レスリー・ゴールド著）はアンネの親友だったハネリ・ホスラーのインタビューをまとめたもので、ここにはアンネとの思い出やハネリ自身のつらい体験も書かれているらしい。『アンネの日記』は中断したが、強制収容所に送られながらも帰還し、少女時代の夢を実現して看護婦となり、たくさんの孫たちに囲まれて過ごしたハネリの体験にもとづいて書かれた『もうひとつの「アンネの日記」』を読めば、これまでの『アンネの日記』では知られなかったさまざまな事実が見えてくるはず。さてこれまでの『アンネの日記』では見えなかった、もう１つの『アンネの追憶』とは？

■□■英語劇の展開に違和感が・・・■□■

「フラッシュバック」は映画特有の時間軸を自由に動かす手法だが、本作はアウシュヴィッツの強制収容所を生き延び今は老人となったアンネの父親オットー・フランク（エミリオ・ソルフリッツィ）が、小さな子供たちに「あの戦争」と娘の思い出を語るシーンから始まる。その思い出は、アンネ・フランク（ロザベル・ラウレンティ・セラーズ）とハネリ・ホスラー（スルディ・パンナ）が小学校に入った時に親友になるシーンから始まり、オットーの決断によって、オットーが経営する会社の建物内の隠れ家に家族が身を隠す決心をするストーリーに連なっていく。その中であの時代の緊迫感が少しずつ伝わってくるわけだが、違和感があるのは登場人物が皆英語でしゃべっていること。

発売元:株式会社パラディソ　販売元:アミューズソフト
税込価格:3990円　(C)ITALIAN INTERNATIONAL FILM sri

アンネたちの英語は我慢することができても、ユダヤ人を取り締まるナチス・ドイツの兵隊たちが英語で命令しているのはいかがなもの・・・。クエンティン・タランティーノ監督の『イングロリアス・バスターズ』（０９年）でも、ナチス・ドイツが英語をしゃべっていることに強い違和感を覚えた（『シネマルーム２３』１７頁参照）が、やはりこの手の映画のセリフはドイツ語でやらなきゃ・・・。

■□■ちょっと詰め込みすぎ？■□■

古くは『ライフ・イズ・ビューティフル』（９７年）（『シネマルーム１』４８頁参照）や『聖なる嘘つき　その名はジェイコブ』（９９年）（『シネマルーム１』５０頁参照）、近時は『黄色い星の子供たち』（１０年）（『シネマルーム２７』１１８頁参照）等は、ナチス・ドイツによるユダヤ人弾圧を描いた名作だが、これらはナチス・ドイツの非道さを訴えるだけではなく、底流にヒューマンドラマとしての切なさが脈打っている。しかして、ユダヤ人迫害から逃れた両親のもとモロッコで生を受け、戦後はじめて祖国イタリアの土を踏んだアルベルト・ネグリン監督は、本作で『アンネの日記』から読み取れるアンネだけで

はなく、親友ハネリの視点からもアンネの実像に肉迫！すると、隠れ家の中、輸送列車の中、そして収容所の中で淡い恋心を抱き合うボーイフレンドのペーター（メシシュ・ガシュパル）の姿や、２度と再会できないと思っていた親友のハネリとベルゲン・ベンゼル収容所で「再会」する姿、さらに収容所の中でも書くことへの欲求を捨てきれないアンネに対して母親のエーディットが食料品との交換で紙と鉛筆を与える姿など、今まで知らなかったアンネ・フランクの「生きザマ」を見ることができる。男と女で完全に仕分けされている絶滅収容所ではアンネは父親のオットーや恋人のペーターと会うことなど絶対できなかったが、ハネリの『もう１つの「アンネの日記」』によれば・・・。アンネを演じたロザベル・ラウレンティ・セラーズは１９９６年生まれの美少女だが、子供のように見えるところとハッと大人の女のように見えるところがある。ユダヤ人の女たちは全員装飾品を差し出さされたうえ髪を短く切られたが、収容所の中でアンネと母親そして姉のマルゴー・フランク（アレクサ・カプリエラン）はどんな生活を？

新しいものを見てやろうという視点で見れば本作はいろいろと新鮮だが、逆にいろいろなエピソードを詰め込みすぎの面もある。たとえば、ユダヤ系の少女ハネリの父親は逮捕される前からシオニストとして有名だったらしい。そのためハネリはパレスチナに行って看護婦になり、たくさんの孫たちと暮らすのが夢だったそうで、ラストにはそんな夢の実現も語られるが、それは単なる情報としての伝達にすぎない。ハネリの視点でアンネを描くのならもう少しそれに徹底してもよかったのでは？そういう意味では、本作はいくつものエピソードを少し詰め込みすぎでは・・・？

■□■ラビとナチス将校との「論争」にも違和感が・・・■□■

本作に登場する興味深いキャラは、小学生たちの先生役をしているユダヤ人の老ラビ（モーニ・オヴァディア）。到着した強制収容所で男と女そして子供たちという３つのグループに分離しようとしたことにラビは異議を唱え、「自分は子供たちと一緒に」と訴えたが、所詮それは無理な要求。そんな時できることは、せいぜいみんなが声を合わせて歌うだけというのは悲しい限りだが、残念ながらそれが現実だった。しかし、ユダヤ人たちの管理が仕事でも知的好奇心の強いナチス将校にとっては、このラビの哲学的素養は師と呼ぶにふさわしいものだったらしい。そのため本作中盤のエピソードの１つとして、教えを乞うナチス将校と、それに対して問答を挑む老ラビとの間で激しい哲学論争がやりとりされる。

この論争自体は面白いが、アルベルト・ネグリン監督はこのエピソードを何のために提示したの？また、『もう１つの「アンネの日記」』の語り手である少女ハネリは、ホントにこんな哲学論争を聞いていたの？さらに私が持つ疑問は、西進してくるソ連軍によって遂にアウシュヴィッツの強制収容所を放棄せざるをえなくなったナチス軍は、当然のようにガス室の爆破等によって「証拠品」を消そうとしたが、その中でオットーが生き残ることができたのはナゼ？そこらあたりの描き方がイマイチ不十分なため、死んでいった者と生き残った者との違いが不明確なのが本作の難点。そんなこんなの難点のためか、『キネマ旬報　５月下旬号』の「ＲＥＶＩＥＷ　鑑賞ガイド」では、３人の評論家はいずれも星２つと低評価・・・。　　２０１２（平成２４）年5月１０日記